

第1回 鶴嶺西地区 防災“も”まちづくりワークショップ開催概要

1 開催概要

日 時	令和5年10月29日(日) 13:30~16:30
場 所	鶴嶺西コミュニティセンター2階会議室2, 3, 4
参加者数	約25名

2 プログラム

① 開会のあいさつ	鶴嶺西地区まちぢから協議会 会長 貴島 義夫
② ワークショップ趣旨説明	茅ヶ崎市都市部都市政策課 門倉 直樹
③ 基調講演 テーマ「防災“も”まちづくり」	東京大学生産技術研究所 加藤 孝明 教授
④ 災害時の被害想定 / 災害をイメージする	NPO法人 日本都市計画家協会 神谷 秀美
⑤ グループワーク / 地域防災力を強化	
⑥ 発表	
⑦ 閉会のあいさつ	鶴嶺西地区まちぢから協議会 副会長 森 繁
⑧ 次回の確認	

3 ワークショップ内容

◆開会のあいさつ

本年度、鶴嶺西地区で、防災“も”まちづくりワークショップを開催することとなりました。

今回のワークショップの内容を企画するにあたり、鶴嶺西地区の特徴として、各団体が活発に活動していること。また、各団体の横のつながりがあることが挙げられ、これら横のつながりをさらに強化し、まちづくり活動、あるいは、防災活動について、情報を共有し、連携した活動を進めていくことが重要であると考えています。



鶴嶺西地区まちぢから協議会
会長 貴島 義夫 氏

◆基調講演 「防災“も”まちづくり」とは？

●講演内容

1. 地域から始める「防災“も”まちづくり」がなぜ必要か？
2. 地域から始める「防災“も”まちづくり」の取り組み方
3. 外してはならない3つのツボ
4. 「防災“も”まちづくり」とは？



東京大学生産技術研究所
かとう たかあき
加藤 孝明 教授

●地域から始める「防災“も”まちづくり」がなぜ必要か？

茅ヶ崎市の防災に関わって十数年がたちました。最初は延焼クラスターのシミュレーション等がかかわり、その後、防災“も”まちづくりワークショップを各地区で開催してきました。

「防災“も”まちづくり」という言葉は聞き慣れないと思います。反対語は、防災“だけ”のまちづくりです。東日本大震災以降は、この防災だけのまちづくりが各地で進められているような気がします。

防災の最終目標は何か？災害は防ぎきれものではありません。そこで、命を守る、できれば財産を守る。最終目標は、災害をなんなく乗り越えることです。

このような最終目標を達成するために、なぜ、防災“も”まちづくりが必要でしょうか。行政の業務が多様化し、縦割り構造となっています。しかも、近年はマンパワー、予算ともに限られているので、大事なところがボトルネック化し、縦割りの間に隙間ができていて、行政だけでは対応しきれなくなっています。細くなった隙間を埋めるためには、共助という視点が大切で、例えば、商店街が防災や福祉に取り組む等、様々な取り組みを掛け合わせ多目的化することが必要です。

行政だけを頼りにするのではなく、地域から活動を始め、そのあとに行政が支援するといった形が、理想だと思います。

●地域から始める「防災“も”まちづくり」の取り組み方

行政が行うまちづくりは、エンジニアリング的であり、料理で言えばレシピをもとに調理器具や食材を揃えて、決まった料理をつくる「急に料理に目覚めたお父さん方式」です。これだと、何か欠けると、おいしい料理が出来なくなります。一方で、地域が主体となるまちづくりは、夕方、冷蔵庫の中を覗き、そこにある食材をうまく組み合わせて、とってもおいしい料理をつくる「夕方のお母さん方式（ブリコラージュ）」という視点が必要です。地域から始める「防災“も”まちづくり」の取り組み方は、地域にある資源や人材を上手に活用して、工夫しながら、防災に取り組むことが重要です。

●外してはならない3つのツボ

- ①災害リスクを確実に理解する
- ②自助・公助・共助のあるべき姿
(あるべき姿を共有し、地域と行政が建設的な議論の場を創出すること)
- ③総合性(防災だけではなく総合的に地域課題を考える)
内 発 性(自分達でやるべき・やりたいと思う機運を高めること)
自律発展性(やりながら内容が膨らんでいくこと)

●「防災“も”まちづくり」とは？

防災“も”まちづくりは、日常の営みと防災を重ねることが重要です。徳島県の伊座利集落では、もともとこの地域あった課題である過疎対策と防災と一緒に取り組んでいます。また、静岡県伊豆市の土肥地区では、観光と防災と一緒に取り組んでいます。

秋田県男鹿市の伝統文化である「なまはげ」は、地区の未婚の男性が「なまはげ」に扮し、家々を巡って厄払いをしたり、怠け者を諭したりするものですが、実は、年に1回、各家庭の暮らしぶりや子供や高齢者の状況を確認する機会になっています。これはまさに、現在でいう避難行動要支援者の情報を集めることと同じことです。このように、日常の営みと防災を重ね、さらに「防災」を意識しなくても自然に災害時の備えができています。このような取り組みが「防災“も”まちづくり」の典型と言えます。

鶴嶺西地区でもこの機会に、この地域における「防災“も”まちづくり」を考え、取り組んでいただきたい。

◆加藤教授と参加者の質疑

加藤先生の講演の後に、参加者から質問がありました。

避難場所のキャパシティオーバーについて、在宅避難(垂直避難)を推進すべきかという質問に対しては、行政の避難計画に、現実の課題を反映させるため、地域と行政が、前向きに繰り返し話し合うべきという回答をいただきました。



今回は鶴嶺西地区というまとまりでワークショップを開催しているが、自治会単位でも実施すべきではないかという意見に対しては、今年度のワークショップをきっかけに、「防災”も”まちづくり」に取り組む仲間を増やしていく。そのためにも、次年度は自治会単位で意見交換をすることも有効であるという回答をいただきました。

◆災害時の被害想定

日本都市計画家協会理事の神谷氏が、茅ヶ崎市のハザードマップの情報を活用して、水害を始め、地震災害等の鶴嶺西地区で起こりうる災害について説明しました。

また、これまでの災害事例から、この地域でどのような被害状況が考えられるかを説明しました。



NPO法人 日本都市計画家協会
かみや ひでみ
神谷 秀美 氏

その上で、鶴嶺西地区内は、河川が近くにあるため洪水による被害が懸念される地域だけど、地震時の延焼火災の危険性もあること。また、水害に対して避難行動要支援者への対応が課題になること。その対応として、平成30（2018）年の西日本豪雨で被災した岡山県倉敷市真備町において、住民が主体となったマイタイムラインの取り組み等が紹介されました。

水害は、数時間前に予測できる災害で、それが起きたときに、どの時点で、どこへ、どのように避難するかを想定しておくことが重要であるとのことでした。

◆グループワーク

今回のワークショップは、まちぢから協議会、自治会、民生委員、地区社協等、地域で様々な活動をされている方が参加しています。5つのグループに分かれ、ファシリテータ進行のもと、日ごろ行っている各団体の活動内容、課題、活動の中にある防災上の効果を出し合い、情報共有を図りました。さらに、そこから見えてくる鶴嶺西地区の“強み”と“課題”を整理し、その結果を発表しました。



※グループごとにとりまとめた内容は別紙で整理しています。

◆発表

[グループ①]

各団体は、それぞれ活動を進めています、課題は高齢化と担い手不足です。

近年は70歳くらいまで仕事をしている人が増え、地域活動に参加する年代が高くなりつつあります。長い目でみて、子育て世代の活動とコラボして、担い手を育てていくことが重要だと思っています。

戸建て住宅が多く、若い世代も移住してきていることをメリットにする一方、若い世代の参加が少ないという課題について、声かけを続けて解決してきたいと思います。



神谷氏・内山氏との意見交換

若い人を呼び込むことは、他のグループでも共通の課題になっているようです。鶴嶺西コミュニティセンターは、子どもたちも含めて、多くの世代が集まる拠点になっているので、この場所を活かして、交流を深めることが有効と思います。

活動に引き込むためには、活動を見てもらうことが重要なので、防災“も”まちづくりの活動を広く知ってもらう工夫を考えていきましょう。

[グループ②]

今日集まった人は、複数の団体に所属して、様々な活動をしている人が多くいます。

そのような人が、団体と団体のつなぎ役になり、横の動きがわかるようになっています。

このような横のつながりを、若い人の団体にも広げていけると良いと思っています。例えば、子ども食堂などと連携できると良いと思います。

多くの団体が協力して、防災のことを考えられると良いと思います。



神谷氏との意見交換

既に団体間のつなぎ役となる方がいるということは、大変、素晴らしいと思います。このような関係性を継承し、さらに工夫していくことが、今後の活動の中で、必要なことだと思います。

[グループ③]

この地域の良いところは、情報ネットワークが充実しているところです。

一方で、足りないところは、活動している人はとても熱心なのですが、関わらない人は、まったく関心がなく、温度差があるところです。

スポーツ団体などと連携して、中学生などに関わりを持っていくことが提案されました。



神谷氏との意見交換

きっかけがなく活動に参加していないだけで、もしかすると、関心が高い人もいるかもしれません。そういった人を発掘できるような場や取り組みができると良いと思います。

[グループ④]

小出川の緑地や景観が良い地区で、この地区の良さは、住みやすさが挙げられます。

このような地区で防災力を高めることが、さらにまちを良くすることに繋がります。

昔からの防災の知恵を学ぶとともに、地球温暖化など新たな課題への対応も必要になります。



神谷氏との意見交換

発表はありませんでしたが、このグループでは、中学生との関係づくりの話が出ていました。地域によっては、学校と協力して、中学校の部活動として防災に取り組むところもあります。そんな取り組みができるといいと思います。

[グループ⑤]

この地区は、市の中でも高齢化率が高く、かつ水害のハザードマップでは、地区全域に浸水が想定されています。高齢者の避難に着目して、検討することが重要です。

避難場所について、行政が決めた避難場所だけでなく、地域の中で話し合い、活用できる場所は、活用できるようにしていきたいです。



神谷氏との意見交換

避難場所は、普段から使うことが重要です。いざというときに、普段から使っていることで、円滑な避難ができます。地域内で話し合っ、避難場所を見つけることができれば、イベント等で使わせてもらうなど、普段から使うための工夫が必要です。

○内山氏の全体講評

各グループの発表から、今日の参加者は、複数の団体に所属し、多くの地域活動をしていることを知りました。そして、そのような方が、団体間の横の情報共有の役割を担っているとのことでした。この地域の特徴として、とても素晴らしいことだと思います。

一方で、若い世代が増えていますが、それらの人との交流が少ないとのことでした。子ども食堂や、スポーツ団体の例示がありましたが、そのような団体との交流・連携、情報共有が有効であると思います。

これまでの個人に頼った情報共有に加えて、しっかりとした情報共有の仕組みづくりや体制づくりをした方が良いかもしれません。

また、鶴嶺西地区は高齢化率が高く、かつ、洪水のハザードが全域に指定されているとのことで、高齢者の避難に注力すべきとの意見がありました。

今回の防災“も”まちづくりワークショップの成果として、団体間の横の連携等、地域の特徴を生かした具体的な取り組みを検討することも有効と思います。

◆閉会のあいさつ

今回のワークショップの中で、この鶴嶺西コミュニティセンターが、様々な情報共有の場になっているというお話がありました。

コミュニティセンターは、若い世代や中学生など、多くの方が利用しています。こういった方々に、我々の方から声をかけ、少しずつ関係性づくりをすることも重要かと思いました。

みなさま、第2回、第3回のワークショップも、よろしくお願いいたします。



鶴嶺西地区まちづから協議会
副会長 もり しげる 森 繁 氏